

《ワーキンググループ報告》

1. 包括医療における核医学検査動向の予測調査
- 外来患者DPCを踏まえて

代 表：小須田 茂（防衛医科大学校 放射線医学講座）

メンバー：玉木長良, 小泉 満, 小泉 潔, 森 豊, 津布久雅彦,
趙 圭一, 橋本 順, 市原清志, 池田俊也

2003年6月からDPC (disease procedure combination) 包括医療が導入された。行政側は、DPC導入は効率的資源配分、医療の標準化、医師のコスト意識高揚とコスト削減が図られることを強調している。DPC導入により核医学検査の減少傾向と外来への検査シフトがみられる。オランダでは外来患者を含めた包括化が開始された。本WGの目的は、頻回に核医学検査オーダーされる全国病院勤務医へアンケート調査を行い、包括医療における今後の核医学検査動向を予測し、医療対策を検討することである。外来DPC包括化導入に関するアンケート調査では、前立腺癌、乳癌のスクリーニング検査としての骨シンチ、肺癌病期診断とし

でのFDG PETのオーダー減少はそれぞれ47%、23%、17%であった。とくに、前立腺癌PSA<10 ng/ml, Gleason score<6では、現行の67%から36%へオーダーが減少した。減少理由として、転移頻度が低い(33%)、経営上(22%)が上位を占めた。減少幅は国公立病院と比較して私立病院で大きかった(33% vs. 58%)。職種による差はみられなかった。肺癌FDG PETの代替検査としての期待度はガリウム、タリウムシンチ8%、腹部CT、骨シンチ75%であった。今後の対策として、外来DPCの回避、私立病院の経営安定化、PSA高値前立腺癌患者の骨シンチの重要性が挙げられた。